

息子の通う小学校の隣に小さな児童公園がある。放課後は低学年の子を中心に子ども達でにぎわうが、二か月程前からそこに一人の青年が来て、子ども達とよく遊んでくれるようになった。はじめのうちは、近所のお兄さんが遊んでくれていただけの風景として親の目にも映っていたのだが、あまり頻繁に見かけるので母親の一人が話をしたところ、彼はガーマンの仕事をしているので昼間は時間があり、子ども達と遊ぶのはボランティアのつもりだと話したという。

その母親は「いつも子ども達がお世話になって……とお礼をいって見守ることにしたのだが、どうしても不審感がぬげえず、学校に相談した。学校も学区域内のしかも隣の公園のこととあって、すぐに教頭先生がその青年に話をしに行った。善意であろうことを前提としているのであまり根ほり葉ほり聞き止すこともできず、とりあえずは、子ども達と遊んでくれるのはうれしいが一応公園の中で

だけにしてほしいと伝えてきたそうだ。子ども達は彼を「兄き」と呼んで慕っている。それでも時々、手錠や警察手帳の様なものを見せたりもするので、親の方は「何か怪しげな人」という思いからぬけられずにいた。

しばらく様子を見ているうちに噂が広まり、校長先生や警察までもが様子を見に来て青年にいろいろ質問していった。その後、公園で彼を見かけなくなった。

子どもをとりまく環境に見知らぬ人が入ってきた時、どう受け入れるか。国際化とまでいかずともこの狭い地域でさえも大人はとまどっている。彼の行動が常識的な手順をふんでいないからといって拒否反応を持つ前にお互いに理解し合う方法はなかったのだろうか。これで、おこったかもしれない事件を未然に防ぐことができた、という声もある。しかし、「結局、私達大人が地域や学校ぐるみであの青年を追い出したのよね。」という一人の母親の言葉が耳に残る。(K)

## 幼児の教育

第九十二巻 第十号

(一九九三年十月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成五年十月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五―二―

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都文京区本駒込六―二四―九

振替口座 東京九―一九六四〇

電話〇三―五三九五―一六六〇四

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。